

失われてゆく、我々の内なる細菌

マーティン・J・ブレイザー 著

山本 太郎 訳

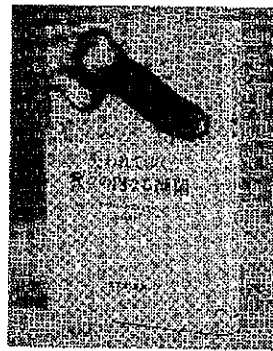
みすず書房

3456円

公明新聞 2015年4月7日

常識を超えた重大な働き

掛け値なしに素晴らしい本である。面白い！是非一読いただきたいと思う。本の内容より先に推奨の言を述べたのは、本書がそれほど印象深いものだったからだ。



抗生物質漬けの生活を今すぐやめよう。目前の人類存亡の危機を回避しなければ。本書の趣旨はこう表現できるかもしれない。わかっているが、多剤耐性菌の問題でしょ、と言われそうだが、著者の論点はさらに一歩、先にある。抗生物質の乱用によって、人類が何万年にもわたり祖先から綿々と受け継いできた常在細菌が壊滅の危機に瀕してい

る、これがポイントなのである。これらの常在細菌は、常識の枠を超えた重大な働きを我々の体内で果たしている。妊娠が進むと体重が増えるのは当たり前であるが、母体そのものと胎児の体重を合わせたよりもなぜ数キログラム、妊婦は重たいか。その余分な重みは、妊娠を支えるために増殖した細菌など、微生物の重さなのだ。ほとんど無菌の状態にある子宮で育った胎児は、産道を通じて産み出される時に、こうした母親の大切な細菌のひとつかたまりを全身で受け止めて、引き継ぐ。受け渡された細菌たちは、子供の健全な成長を支える。帝王切開や幼児期の過剰な抗生物質投与（カゼの多くはウィルスによるので抗生物質は全く効かないのに投与される）が、これらの常在細菌を一扫して

東北大学大学院教授

山元 大輔 評

しまうのだ。悪者菌の親玉にされているヒロリ菌すら、我々の感染症防御の役に立っているという。

自分は抗生物質をほとんど飲んでない、という方もおられるだろう。しかし、食肉用に飼育される家畜には、単に早く太らせる目的で抗生物質が与えられ、その残渣をあなたは食べ物から、そしてさまざまな飲料から日々取り込んでいる。

著者は、急速に増える子供の肥満、花粉症、喘息、さらには自閉症の背景に、常在細菌の消滅があると睨んでいる。その対策はあるのか？「糞便移植」や「膈内ガーゼ」といった秘策について、本書を読んでものお楽しみ、としておこう。

◇
マーティン・J・ブレイザー ニューヨーク大学トランスレーショナル・メデイスン教授。米国感染症学会元会長。